

月刊 アートコレクターズ

Art Collectors

9
2026

猫

は最高傑作である



インタビュー

中 昌之 / チン・ペイイ / 白亜器 / 町田尚子

対談

石田淳一 × 伊勢田理沙 寄稿 赤川 学 / 諏訪 敦 / 真辺将之



中尾 変「メルヘラ神七変化像」

「メンヘラ」という言葉は、2chのメンタルヘルス板で精神疾患の当事者によって生み出されたが、その後、メンタルヘルスの問題に深く関わりのない人々によって「メンヘラ＝（主に女性の）境界性パーソナリティ障害的で、付き合っていくのが大変な人」という理解のもと広まった俗語である。こうした変遷からも分かるように、この言葉を考えるうえで、当事者性と客観的な視点の対比という構図が重要になる。

いつもどうしても当事者目線で「メンヘラ」を見てしまうから、中尾変の「メルヘラ神七変化像」を見て、どんなに悲しくても怒っていてもヒスっていても、外からはこんなにのっぺりとしか見えていないのかと驚いた。しかしそれは救いでもある。悪感情は自分の世界に自分を閉じ込めてしまうが、一歩外に出てみると、世界は他の狂いで満ちていて、その全てが滑稽だ。行きがけに食べた家系ラーメンを戻しそうになる感覚を覚えながら、嬉々として画面を見つめた。

●中尾 変 個展「世界標準不適合」 7月16日～7月30日／肆-YON- gallery

久村 卓「PLUS_JUBILEE's dust cloth 2」

ラルフローレンの馬やラコステのワニのようなファッションブランドのロゴを利用して、実際の衣服に額を設えて錯視的に展示空間を表現する久村卓。掲出作で用いられているのは、衣服ではなく雑巾である。それも制作の際に絵具を拭うのに使用した雑巾で、あちこちに染みや痕が散らばっている。汚れと言ってしまうとそれまでだが、久村はこれを逆手に取ってアメリカの抽象表現主義を思わせる作品に再解釈している。なんだか大喜利めいている気もするが、展示空間という装置を再現するだけで、こうも見え方が変わってしまうのかという自分の認識のいい加減さに、ハッとさせられるのであった。

●日日日 Day by Day by Day 7月24日～8月23日／Yoru Aozora

宗行里々子「ミルキーウェイ」

神戸を拠点に活動を続ける宗行里々子の個展が八王子で開催された。「光の証明」と銘打った今回の展示では、巡礼や天使などのキリスト教的世界観を想起させる作品群が目立ち、どの作品にも、愛や祈りなど作家の内面にしまわれている大切な思いが、静かに、しかし力強く現れていた。螺旋状に展開する空間の奥に展示されていた掲出作は、そのような思いが印象的な構図と深くきらめいた色彩によって堂々と表現されている。画面からはまるで、ふつつつと湧き上がった創作への欲求がようやく居場所をみつけたかのような、画家として描くことの喜びを確かな実感でもって楽しんでいるかのような感触が伝わってきて、見ているこちらまで晴れやかな気持ちになった。

●宗行里々子 個展—光の証明— 7月29日～9月13日／BrainBrunnGALLERY

編集部が
これが欲しかった!

アートコレクターズ編集部が、
実際に行って、見て、欲しい!! と思った
アート作品 だけをご紹介します。

■ 最新情報、随時更新中です!

✕ @atcolle

📷 artcollectors_

押江千衣子「ねっこ」

鉢に植えられた植物の葉の、折れたり捻れたりして少しずつ色を変化させる様子が描かれている。オイルパステルの粘性のある質感が生命力を感じさせ、実に気持ちいい。

妖しく曲がりくねった根の描写にも惹かれる。その色は土や葉の色と渾然一体となって、人間のつくった境界など無視するかのようである。そうした混沌から、先述の瑞々しい葉が伸びていくのだ。鉢の手前側の側面が描かれていないのは、この生命の源たる根＝土をたっぷりと描くためなのだろうか。

1990年代以来ずっと植物を描いてきた押江千衣子だが、その作品の中でも特に何気ない一部分を描いた一枚と言えるのではないだろうか。こうした試みが大作に発展するのを想像できる点も、小品の良いところだ。

●5人の新作展 2026 6月20日～8月8日／西村画廊

薬師川千晴「rub #AYBYPWGS」

若手作家数名のグループ展で見かけた薬師川千晴の作品に目が止まった。ブラウン、ピンク、レモンイエロー、マリンプルー、ネイビー、グリーン、イエロー、シルバーの8色で構成された抽象画で、各色は混ざり合うのではなく塊に分かれている。絵具は下地が所々見えるほど薄く伸ばされているが、砂が混ぜられているのか強い質感があって面白い。よくある絵具の薄い膜による繊細な表現を見るが、例えば麻のザラザラとした質感など、対極的な要素を取り入れた方が実は作品として魅力的に成り立つ。そのまさに好例だった。彼女の作品をもっと見たいと思われた。

●Emerging Vision : The New Generation of Japanese Artists
6月27日～8月16日／ギャルリーためなが東京

Kiaf SEOUL

coex

2026.9.2-9.6

Lead Partner

KB 금융그룹